

(別紙様式3)

令和5年度あいちラーニング推進事業研究報告書【重点校】

学校番号 78

学校名 愛知県立半田商業高等学校

校長氏名 林 正也

研究責任者職・氏名	教諭 ・ 八木 勝	
研究テーマ	「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善 ～生涯の学びを支える「非認知能力」の育成を目指して～	
本年度の研究目標	(1) ICT 機器を使用した授業展開の研究 (2) 生徒の非認知能力を高めるための授業展開の研究 (3) ICT 機器の利用方法の研究	
研究の実施内容		
実施月日	内 容	備 考 (対象生徒等)
5月26日	・職員会議にて、当事業について全職員へ連絡	
9月19日	・教科主任委員会にて、実践内容および期間の設定を検討	
9月～ 11月	・授業公開（実施期間）	対象生徒:全生徒 対象職員:一人一台タブレットを 配備されている 教員
11月15日	・公開授業ならびに研究協議会 9:50～12:50 公開授業 2限 家庭総合 ビジネス・コミュニケーション 3限 英語コミュニケーション I プログラミング 4限 全体会 (授業者説明、研究協議・質疑応答、 情報共有)	通常時間で実施 家庭(総合ビジネス科・2年) 商業(1年) 外国語(1年) 商業(情報処理科・2年)
12月～ 1月	・全職員からの報告書提出期間	対象職員:一人一台タブレットを 配備されている 教員

研究成果の評価及び普及・還元に関する実績

1 研究対象の教員及び研究内容

本校では、若手教員を中心として ICT 機器を授業で活用している。しかし、教科の特性により ICT 機器を使用することが難しいと考えている教員や ICT 機器を殆ど使用しない教員も少数ではあるが存在する。本校教員の ICT 機器の活用能力に大きな差があることが分かっていた。本校は今年度 1 年目の研究であるが、ICT 機器を使用していない教員は使用することを目標とし、普段から ICT 機器を活用している教員は、生徒の主体性を高める ICT 機器の活用場面を検討し実施することを目標とした。

2 校内の公開授業期間の設定

本校教員が ICT 機器の活用及び活用場面について研究するために公開授業期間を設定した。この期間では ICT 機器を活用した研究授業の日程を授業者が設定し、教務から他の教員に参観を促した。研究授業の評価は授業者の自己評価、参観した教員の評価、生徒からの評価とした。また、教員からこの期間で行った研究について報告書を提出していただいた。

3 研究成果

(1) 主管校(横須賀高等学校)による授業参観及び研究協議

家庭科(家庭総合)、英語科(英語コミュニケーション I)、商業科(ビジネス・コミュニケーション、プログラミング)の授業を参観していただき、その後、研究協議・質疑応答・情報共有を行った。研究協議では ICT 機器の活用方法・効果的な指導方法等について、次のような具体的なご指導をいただいた。

繊維を観察する授業では、実物を使用して観察させることはとてもよい、タブレットのカメラ機能で動画を録画すれば、授業後で見直すことができる。

ICT 機器を使用しているが、1 対 1 の情報のやり取りになっているので、グループ全体での情報共有ができるとうい。

(2) 校内の公開授業期間での成果

各教員は次表の「学習場面に応じた ICT 活用事例」を参考に目標を設定し実践した。また、下表は各教員から提出された報告書より取組のあった件数である。

【学習場面に応じた ICT 活用事例 文部科学省「ICT 機器を活用した指導方法」より】

A 一 斉学習	A-1 資料や動画を ICT 機器を使って提示する、生徒の興味や理解度を高める	18 件
	A-2 ICT 機器で提示した資料に書き込み等を行い、理解度を助ける	7 件
B 個 別学習	B-1 ICT 機器を活用した個別最適な学習	3 件
	B-2 インターネットを利用した情報収集を行う	4 件
	B-3 写真や動画による記録を行う	3 件
	B-4 シミュレーションなどのデジタル教材を使用して試行を深める	
	B-5 マルチメディアを活用した資料や作品制作	3 件
	B-6 情報端末の持ち帰りによる家庭学習	1 件
C 協 働学習	C-1 ICT 機器を活用したグループやクラスでの話し合いや発表	8 件
	C-2 ICT 機器を活用した複数人で意見・考えを議論して整理	5 件
	C-3 ICT 機器を活用した共同制作	
	C-4 ICT 機器を活用した学校外との連携	

https://www.mext.go.jp/content/1407394_6_1.pdf より抜粋

この結果から、本校では ICT 機器を資料提示やグループによる話し合いの場面で使用することが多いことが分かった。また、普段の授業では ICT 機器を使用する機会が少ない教員でも ICT 機器を活用することによって、生徒にとっては見やすく、指導者にとっては負担の少ない形で授業が展開できたという声もあった。しかし、ICT 機器を使用するために準備に時間がかかり、教科本来の研究に時間を奪われてしまうなどの否定的な意見もあった。

各教科の報告書を次に掲載する。

教科:国語科

1 はじめに

(1) 科目

文学国語

(2) 単元

古典の世界を味わおう 教材 『枕草子』一二三段 はしたなきもの

(3) 生徒観

旧カリキュラムの「国語総合」を履修した生徒たちよりも、古典に触れる機会が少なく、動詞の活用など古典文法の基本的な事項に触れていない生徒たちである。よって、この単元では、文法事項の暗記を求めるのではなく、要所で現代語訳に必要な情報やヒントを与え、実際に現代語訳を考える作業を通して、すぐに解答を得て暗記するのではなく、自身で考える作業を行わせたい。加えて、平安時代の貴族の生活や、現代に生きる我々との差異や、共感できるところも探させていきたい。

また、本単元に臨むにあたって、生徒は自身で普段使いのノートに3行開きで本文を写しており、その隙間に現代語訳やメモを取るように指示してあり、他単元でも板書をプロジェクタに置き換えて授業を行っているので、この形式には慣れている。

2 本時の目標

本文の現代語訳を、ポイントを押さえて理解し、話の流れを掴む。

3 使用する ICT 機器及びソフトウェア

教科書本文が等間隔で PowerPoint 及びそれを投影するプロジェクタ

4 ICT 機器の活用場面

授業を通して、黒板に PowerPoint を投影

5 ICT 機器を活用するねらい

- ・生徒の板書をノートに取る作業の補助
- ・生徒の視覚的理解の補助
- ・教員の負担軽減

6 結果

本文がフォント文字、新たにタブレットを通して追加で書きこむ文法事項や現代語訳を手書き文字というように、生徒がどこを自分のノートに書き足せばよいのか視覚的に確認しやすいため、板書をとることに對してかける時間を短縮できた。プロジェクタの利点として、拡大・縮小を用いて、本文のどの部分をやっているかを認識させやすかった。また、複数クラスで同じ授業を行うため、本文を板書する時間や労力を削減できた。

7 考察

文字を書くときに黒板の方を向いていなくてもよいと、生徒の動向・様子が把握しやすいのも一つの利点と感じた。プロジェクタ以外の部分にメモ書きをすることで、生徒の中で何を優先的に理解しなければならないかを印象付けることもできた。また、複数クラスで同じ授業を行うため、その都度本文の板書を行う時間的・心理的負担は大きく、それを削減できるだけでも授業効率はかなり良くなっていると考えられる。

教科:地歴公民科

1 はじめに

(1) 科目

歴史総合

(2) 単元

第5章 第一次世界大戦と大衆社会

19 第一次世界大戦

(3) 生徒観

中学校の頃から「社会科」科目に苦手意識があったり、受験科目として使用しないことから積極的な学習意欲に欠ける生徒が多い印象である。一方で、歴史を題材にしたゲームには興味関心を示したりするなど、あくまで「学習としての歴史」を忌避しているのもあって、何かのきっかけがあれば歴史に興味関心を持つように思える。

2 本時の目標

第一次世界大戦の勃発した原因について、20世紀初頭の欧米諸国の国際関係（横のつながり）を通じて理解する。また、大戦のもたらした影響を各国の社会情勢を踏まえて理解する。

3 使用する ICT 機器及びソフトウェア

教員用タブレット、プロジェクタ・スクリーン

4 ICT 機器の活用場面

(1) 通常の板書のように、スクリーンにヨーロッパの地図を表示する。大戦の経過とともに、同盟関係や侵攻ルートパワーポイントを活用し、地図上に示していく。

(2) 「大戦の長期化」の部分については、実際に様々な新兵器が戦場に投入された様子を動画資料を再生し、イメージをつかませる。

5 ICT 機器を活用するねらい

(1) 地図を板書する手間の省略。また、地図上のデータを時間経過とともに変化させることで、生徒が複数の地図を照らし合わせる中で情報が混乱することを防ぐ。

(2) 「戦争」という自分が経験したことのない事象について、動画資料を用いてイメージをさせる。

6 結果

生徒の反応では、「イメージが湧いた」「地図がわかりやすかった」という意見が過半数を占めた。ただし、「光の反射でスクリーンが見づらかった」「教室後方だったので細かい数字が見にくかった」という意見もあった。

7 考察

まず、今回とった手法については、スクリーンに投影する方法では教室や座席の環境によって見づらいという生徒も出てくるため、生徒個人のタブレットに画像を提示するのと併用した方が良かったと感じた。

次に、今回の取り組みがどのくらい学習面の結果に結びつくか、という検証の必要性がある。歴史総合は今年度から新たに実施される科目であり、昨年度の学習成績と比較することができない。そこで、来年度の生徒と考査の結果等を比較していく必要があるだろう。

教科:数学科

1 はじめに

(1) 科目

数学 I

(2) 単元

基礎から学ぶ SPI ベーシック問題集

12 「損益算」

(3) 生徒観

就職希望者と進学希望者が半々であるが、数学に強い苦手意識を持っている生徒が多い。なぜ「数学を学ぶ必要があるのか」、「将来、必要なのか」といった疑問を持っている。そこで、単純に教科書の内容だけを教えるのではなく、将来、使うことのできる数学または商業に関連する分野の授業をすることで、生徒の興味・関心を深めるよう努めている。

2 本時の目標

就職試験で必要となってくる、SPI に初めて取り組むので、まずは SPI とはどんなものなのかを知る。そして、実際に問題を解いてみることで、数学が必要であることを再認識させ、今後の授業に前向きに取り組むことができるような動機付けをする。また、苦手分野を把握することで今後の学習につなげる。

3 使用する ICT 機器及びソフトウェア

教員用タブレットと生徒用タブレット、パワーポイント、Microsoft Teams

4 ICT 機器の活用場面

(1) パワーポイントを使用し、SPI とは何かを説明する。

(2) Microsoft Teams のクイズを用いて生徒自身が SPI の問題を解く。

(3) 集計データを用いて自分と他社との比較し重点的に学習する内容を共有する。

5 ICT 機器を活用するねらい

- (1) 各問において、その場で正誤が判明するため採点する時間を短縮できる。
- (2) 自動で集計することができるので、その場で結果を共有することができる。
- (3) 結果をタブレット内に残しておくことができるので振り返りの学習に取り組みやすい。

6 結果

クイズ形式で問題を解くことができたので主体的に授業に参加できたと回答する生徒が通常の授業よりも多くいた。また、結果の共有もすぐにできたため、今後の自分の課題を発見することができた。

7 考察

今までの授業は教員側が ICT 機器を用いて効果的に説明することに重きを置いていたが、今回は生徒が ICT 機器を活用する形の授業にしたため、いつもより主体的に取り組むことができているように感じられる。特に、結果がすぐに分かり他の生徒と共有できることで関心が薄れることが無かったように感じられた。今回は SPI の用に選択式だったためクイズ形式で取り組むことができたが、計算や記述式の問題に、どのように応用するかを考える必要がある。また ICT 機器の活用する際、生徒のタブレットに問題が生じており、うまく使えないなどの課題があるため、そのような問題を予めどう対処するか考えておく必要があると感じた。

教科:理科

1 はじめに

- (1) 科目
生物基礎
- (2) 単元
第4章 生物の多様性と生態系
第4節 生態系のバランスと保全

(3) 生徒観

授業には真面目に取り組んでいるが、クラス内に基礎学力が低い生徒が多く集まってしまった感がある集団である。

2 本時の目標

人間の生活が生態系に及ぼす影響について認識し、生態系の保全の重要性について理解する。

3 使用する ICT 機器及びソフトウェア

書画カメラ、プロジェクタ、タブレット

4 ICT 機器の活用場面

事前のレポート作成時及び本時のレポート発表時

5 ICT 機器を活用するねらい

生態系とその保全に関する複数のテーマから1つを選択し、現状を調べながら対策や今後の課題についての考察を深化させて自分の考えをまとめさせる。

6 結果

一人2分間のレポートの発表を行い、その後にグループ活動で意見交換を実施した。発表の良かった点と自分なりの考えを伝え合い、個人思考の視野の広がりにつながった。

7 考察

生態系とその保全に関して、個人思考とグループ活動により現状や課題について共有することができ、生徒の理解は深まったと考えられる。レポート発表時のワークシートを準備できると、その後のグループ活動がより活発になったと思われる。また、発表の中には専門用語も使われることがあり、生徒の一部が内容の理解に至らなかったりグループ活動での意見が出にくい場面も見られ、改めて専門的な知識を授業で指導する必要性を感じた。

教科:保健体育科

1 はじめに

- (1) 科目
体育
- (2) 単元
球技「ハンドボール」
- (3) 生徒観

3年生の雰囲気は落ち着いており、科目「体育」の授業は活発的で積極的に授業を受けることができている。その反面、自分たちで考えて行動できる生徒が少なく、指示待ちの生徒が多く見受けられる。授業を通して生徒一人ひとりが自主的かつ主体的に考えて行動をとれるようにさせていきたい。

2 本時の目標

ICT 機器を用いた授業を行うことで、生徒が主体的・自発的に問題解決を行うとともに話し合いの場を設ける。また、生徒が客観的に自分の動作を確認し、正しい体の動きを理解し改善していく能力を伸ばすことを目標とする。

3 使用する ICT 機器及びソフトウェア

タブレット、練習計画表

4 ICT 機器の活用場面

試合の様子をタブレットで撮影させる。その動画を授業の最初に、グループ毎で確認させる(得点場面、失点場面)。それをもとにチームの良かった点、課題、個人の課題を客観的に確認させ、チーム練習や試合に活用させる。

5 ICT 機器を活用するねらい

生徒が客観的に自分の動作およびチームの課題を確認し、正しい体の動きを理解し改善していく能力を伸ばすことを目標とする。

6 結果

ICT 機器を活用し、動画分析を行うことによってグループ内のコミュニケーションが活発になった。また、客観的に自分の動きを確認することによって、個々の課題が明確になり動作の改善につながった生徒が多く見受けられた。その他にも運動意欲の向上と理解力を深めることができたのではないかと考えられる。

アンケート結果では、ICT 機器を使うことによって、「自分の動きがわかり、改善点がわかった」、「他の生徒へのアドバイスが多くなった」など一定の効果が認められたと考えられる。

7 考察

体育の授業では、生徒の活動量と ICT 機器の使用のバランスが懸念事項である。その他にもタブレットを屋外で使用する際の置き場所や画面の反射など様々な課題もある。しかし、生徒が主体的に学び、新学習指導要領の「課題を発見し、その解決を目指した活動を通して、運動やスポーツの効果的な学習の仕方を身に付けることができるよう指導する」には、ICT 機器の活用は有効である。今後も試行錯誤しながら様々な活用方法を研究していきたい。

教科:外国語(英語)科

1 はじめに

- (1) 科目
コミュニケーション英語 I
- (2) 単元
COMET English Communication I Lesson7
「High School Aquarium」
- (3) 生徒観

全体的に見てまじめに授業に向かう雰囲気があるが、英語の発音には自信がなく消極的な生徒も多い。言語活動を通して、人とのコミュニケーションを楽しむ態度を育成したい。

2 本時の目標

本文の内容を活用して、自分たちの学校の有名なところやアピールポイントについて発表するための原稿を作成する。

3 使用する ICT 機器及びソフトウェア

教員用タブレットと生徒用タブレット、プロジェクタ、デジタル教科書、数研発音マスター、Teams、ロイロノート

4 ICT 機器の活用場面

- (1) デジタル教科書をスクリーンに投影し、本文に関する写真を提示する。
- (2) 数研発音マスターを使い、発音の練習をさせる。
- (3) Teams の音読練習機能を使い、音読を録音して提出させる。採点結果を返却する。
- (4) ロイロノートの共有ノートを活用し、学校の魅力についてブレインストーミングとクラスメイトへの共有を行う。

5 ICT 機器を活用するねらい

- (1) 本文に関する写真を提示することでより記憶に定着させやすくする。
- (2) タブレットを使って発音、音読練習をさせることにより、個に応じた即時のフィードバックを行う。また、生徒のモチベーションにつなげる。
- (3) ロイロノートを活用することで、他の生徒の意見から学びを得ることができる

6 結果

タブレットを使った発音、音読練習は今回の研究事業をきっかけに新たに取り入れた。クラスによっては、タブレットに音声を吹き込むことに抵抗のある生徒もいたが、全体的に見ると、活発に取り組んでいる生徒の姿が多く見られた。

ロイロノートによる意見の共有では、他の生徒の意見から新たな気づきを得ることができ、その後の英作文作成に役立った。

7 考察

これまでの授業では、本文の音読をリピート、ペアワークでやらせるのみで、生徒の音読に対する動機づけが不十分だったように感じる。今回、タブレットを使って発音の採点、即時のフィードバックを授業に取り入れたことで、生徒の音読への意識が変わり、より積極的に発音練習に取り組むようになったと感じている。

本校は英語の授業が週3時間のみである。限られた時間を有効活用していくために、生徒に身に付けさせたい力を明確化し、それを成し遂げるための ICT 機器の効果的な使用方法について今後も研究をしていきたい。

教科:家庭科

1 はじめに

- (1) 科目
家庭総合
- (2) 単元
食生活をつくる「調理から後片付けまで」
- (3) 生徒観

授業に熱心に取り組む生徒が多い。与えられた課題にも自ら工夫し、解決しようとする姿勢がみられる。調理に高い関心を持つ生徒が多いが、生活経験が少ないため食品の知識に乏しく、基本的な調理技術も身につけていない生徒がいる。

2 本時の目標

ピラフ・スープの基本、根菜のゆで方、ゼラチンの扱い方を身につける

3 使用する ICT 機器及びソフトウェア

タブレット、プロジェクタ、パワーポイント

4 ICT の活用場面

食品の状態・調理工程

5 ICT を活用するねらい

画像・動画を示すことで理解を深める

6 結果

生徒は、材料の扱い方や食品の成分、調理工程や調理する際の注意点について理解を深めることができたようである。また、興味・関心を高めることができた生徒は、自ら他の料理を調べ、調理の計画をすることにつながった。さらに、調理工程にはそれぞれ意味があることに気付いた

生徒もいた。

7 考察

画像や動画を示すだけでなく、生徒がタブレットを用いて参加できる内容を取り入れたい。また、ゲーム形式など生徒が楽しみながら主体的に取り組める内容を検討していきたい。

教科:商業科(分野共通科目)

1 はじめに

(1) 科目

総合実践

(2) 単元

給与計算

(3) 生徒観

比較的落ち着いており、学習に真面目に取り組むことができる。卒業後、就職する生徒もおり、これから労働者として深くかかわってくる給与体系や社会保険制度の知識を身に付けさせたい。

2 本時の目標

給与体系を理解し、計算できるようにする。

社会保険の種類や役割を理解するとともに保険料を計算できるようにする。

3 使用する ICT 機器及びソフトウェア

タブレット、プロジェクタ

4 ICT 機器の活用場面

(1) プロジェクタによりテキストを映しながら重要箇所を説明していく。

(2) 生徒各自がタブレットを用い、源泉徴収税額表など必要な資料をインターネットから探す。

5 ICT 機器を活用するねらい

(1) テキストの説明箇所を映すことで明確に示し、特に重要箇所を確認させる。

(2) インターネットには多くの情報が公開されていることを知り、自ら必要な資料を探し利用することができるようにする。

6 結果

テキストを映すことで全員に説明したい箇所や重要箇所を的確に伝えることができた。また、イラストなどを指し示しながら説明ができたので、伝わりやすかったと思う。

所得税や各保険料の計算では、生徒たちに使用する資料をインターネットで検索させ、見方を説明した。その後、自分のデータで計算を行った時は、周囲と相談しながら興味を持って行う姿が見受けられた。

7 考察

教科書などを使って説明する時、「何ページの何行目」と言ってもついてこれない生徒もいるだろうという不安はいつもあった。しかし、プロジェクタで映すことで生徒は目で見て確認できるので的確に伝えられると思う。

給与計算では、ただテキストの資料を使った場合、「計算した」だけで終わってしまったと思う。しかし、インターネットから資料を探すことで、実社会で行われていることを自分も行っていると実感ができ、これから労働者として関わりを持つこととして記憶に残るのではないかと思う。

教科:商業科(マーケティング分野)

1 はじめに

(1) 科目

マーケティング

(2) 単元

第7章 プロモーション政策

第2節 プロモーションの方法⑥

(3) 生徒観

全体的に座学の学習に対する意欲は高くないが、生徒本人が興味関心ある内容への取り組み姿勢は良好である。ただ、本人の作品に対する満足と周りの理解や意見が乖離していると感じ

る。作品作り及びアンケートを用いて、乖離の現状を認識させ、視覚を使ってどのような作品が評価されるか理解できるのではないかと考える。

2 本時の目標

商品開発に伴う商品の販促 POP 作成を通じて、どのような POP が消費者に受け入れられるか考え、相互評価することで優秀な作品は何が優れているのかを学ぶ。

3 使用する ICT 機器及びソフトウェア

教員用タブレット、生徒用タブレット、プロジェクタ、スクリーン、ロイロノート

4 ICT 機器の活用場面

(1) 実際の売り場で使用されている POP の画像を表示して、どのような POP が販促活動に用いられているか視覚的に理解させる。

(2) ロイロノートのカード機能で POP の作成をさせ、提出させることで全体の作品を管理する。

(3) ロイロノートのアンケート機能を使い投票させることで、消費者に受け入れられる POP を特定し、どのような特徴があるか情報を共有する。

5 ICT 機器を活用する狙い

視覚で訴えられるので、文章で理解できない生徒にも伝わりやすく感じる。また、アンケートの集計などが時短でき、生徒が話し合う時間を十分確保することができる。

6 結果

視覚に訴えることで、生徒は普段より意欲的に授業に取り組んでいたと感じる。さまざまな POP を紹介することで生徒の創造力を刺激できたのではないかと思う。またアンケート集計がすぐに提示できることで、時間が空くことなく次に進むことができ、生徒の話し合いに十分な時間が生まれた。

7 考察

デジタル機器を導入することで、時間を効率的に使えるようになったと感じる。しかし、タブレットの扱いに不慣れな生徒も多く、画像の貼り付けや、加工などの質問が多く上がってしまった。デジタル社会で活躍する人材の育成のためにも、生徒を置き去りにせず、早い段階での基礎力の定着を意識するべきだと感じた。

教科:商業科(マネジメント分野)

1 はじめに

(1) 科目

ビジネス・マネジメント

(2) 単元

第2節 経営理念と経営戦略 「経営戦略とマネジメント」

(3) 生徒観

総合ビジネス科に所属する生徒は、地域との連携を多く取り組んでいることが特徴である。また、同時に履修しているマーケティングの授業でも、同じ内容を取り扱っていることも多いことから、なるべく生きたビジネスの知識として、実際の企業名や企業が取り組んでいる事柄、ビジネスの諸問題などを具体的に示すことで、生徒の興味・関心を深めるよう努めている。

2 本時の目標

経営戦略とマネジメントの内容として、4つの戦略を理解する。本時では、非常に分かりづらい集中戦略について具体例を用いて理解する。

3 使用する ICT 機器及びソフトウェア

タブレット1台。パワーポイント。

4 ICT 機器の活用場面

導入部分で、前提となる話をした後、資料を提示して、グループワークにて活用した。

5 ICT 機器を活用するねらい

実際の企業のある経営について、なぜこのような行動をとったのかを考えさせた。限られた情報をパワーポイントで提示し、生徒同士の情報交換の上で、「なぜ」に迫るようにした。

6 結果

今回は、2023年7月に大手ハンバーガーメーカーのMが、都心で商品Bの値段を上げた話題をとりあげた。

実際には、横浜駅の西側と東側のMで、一方の店舗（東側）では値上げを実施したが、他方の店舗（西側）では値上げしなかった。これがなぜかについて、生徒に考えさせた。

スライドには、横浜駅の西側と東側の地図を投影させ、その地理的な情報からなぜかを考えさせた。

半数のグループは、地理的な情報から、客足を推測し、答えを導き出した。

7 考察

集中戦略とは、特定の顧客や特定の地域に経営資源を集中する戦略である。

横浜駅の東口を出ると、Lや、Sなどの大型百貨店がある。

西口は、ロータリーとなっており、加えてTなどの大型百貨店がある。西口はロータリーとなっていることから、自然と客足が多いことが推測できる。

また、Mは、独自に価格設定をしており、地域の特性に応じて、通常店・準都市店・都市店と定めている。通常店よりも、都市店の方が価格設定を高くしている。このような具体例を説明することで、企業の経営戦略を学ぶことができ、生徒の関心や理解度も増したと考えられる。

教科:商業科(会計分野)

1 はじめに

(1) 科目

商業科「財務会計Ⅰ」

(2) 単元

財務諸表分析

(3) 生徒観

学習に対して受け身姿勢の生徒が多い。考え方の道筋を示すことで主体的に取り組んだり、他の生徒と協力して問題や課題に取り組むことができる。

2 本時の目標

利害関係者が知りたい情報を得るために、財務諸表のどの部分を見て、どのように分析し判断すればよいのかを考える。

3 使用する ICT 機器及びソフトウェア

教員用タブレット、プロジェクタ、One Note

4 ICT 機器の活用場面

生徒が使用している教科書や問題集などの教材を One Note に取り込み、プロジェクタで黒板に投影することで、説明しているポイントを明確化する。

5 ICT 機器を活用するねらい

財務諸表分析は貸借対照表や損益計算書に示されている金額をグループに分け比率計算などを行う必要がある。どの金額がどのグループに入るのかを説明するために、生徒が見ている教材と同じものを黒板に投影して書き込みを行うことで理解が深まる。

6 結果

ほとんどの生徒が戸惑うことなく各項目を分類することができ、財務諸表分析を主体的に進めることができた。板書にかかる時間を削減できたので、一つ一つの比率の説明をより深く行うことができた。

7 考察

ICT 機器を使用せずに従来どおり黒板のみを用いて授業を行った場合を考えてみた。言葉だけでグループを伝えた場合、聞き漏らしや聞き間違いが起きる可能性があり、また、財務諸表を板書して説明した場合、板書に時間を取られ十分な説明時間を確保することができない恐れがある。よって、ICT 機器を活用することで生徒にとってわかりやすい授業を効率的にできると感じた。今後は、実際の企業の財務諸表を生徒にタブレットを用いて調べさせ、分析や考察をさせていきたい。

教科:商業科(ビジネス情報分野)

1 はじめに

(1) 科目
情報処理

(2) 単元

3章 情報の集計と分析

4節 情報の整列・検索・抽出 発展学習

(3) 生徒観

学習に前向きに取り組む生徒が多いクラスである。興味・関心を持つことに対しては、周囲を巻き込んで活動をしてくれる。思考力が高いわけではないが、考えて表現することができないわけではないため、応用問題などを準備することで積極的にチャレンジをさせている。

2 本時の目標

- ・データベースの特徴を理解する。
- ・基本的なテーブルとクエリの作成ができる。

3 使用する ICT 機器及びソフトウェア

タブレット (Access)、プロジェクタ、大型スクリーン

4 ICT 機器の活用場面

スクリーンを使用して、操作を見ながら Access の作成を行う。

5 ICT 機器を活用するねらい

ソフトの操作や手順などを説明する際に、誤った操作を覚えないように手元の動きを視覚的に捉えさせる目的でスクリーンを使用する。

6 結果

多数の生徒が例題の通りにテーブルを作成することができた。少数の生徒に関してもサポートの教員がすぐに動ける体制であるため、課題ができていない生徒はいない。

7 考察

「情報処理」の授業の中でも Access は、馴染みがあまりないソフトウェアを用いた授業である。細かな規則が多く、操作の難しい内容となるのでスクリーンの使用については必須であると思う。普段使っている Excel と差別化するポイントとして、データの型を設定して入力ミスを少なくすることができることを伝えた。生徒のアンケートからは、概ね理解できた内容がほとんどであった。教員からのアンケートでは、拡大鏡の機能を使用することで、どのボタンを押しているのかをより明確にすることができるとあった。今後の授業の中でその点について学んでいきたいと考える。

※ 本研究報告書は、令和6年3月12日までに当該地区の主管校に提出する。

※ 名古屋地区においては、旭陵高校、緑丘高校、愛知総合工科高校は昭和高校へ、守山高校、愛知商業高校、南陽高校、名古屋工科高校は天白高校へ提出する。